

彦根市埋蔵文化財調査報告 第28集

平成6年度 市内遺跡発掘調査報告書

— 滋賀県指定史跡湖東焼窯場跡 —

平成 7 年 3 月

彦根市教育委員会

序

彦根市には、特別史跡彦根城跡があり、旧中堀までで48.8haにおよぶ広大なものであります。城跡内には、国宝「彦根城天守」をはじめとして、全国でも珍しい「馬屋」等重要文化財建造物群が現存する数少ない近世城郭の代表例として、世界遺産の候補として暫定リストに登録されています。

また、一方石田三成の居城があった佐和山の南麓に湖東焼窯場跡が存在しております。湖東焼は、数々の優品を産みだした近世後半の磁器生産窯として有名であります。その生産の実態は残された作品をとおしてしか知ることができませんでした。

しかし、窯場絵図等の資料が発見され操業のようすが明らかになり、平成3年3月に県の史跡指定を受けました。

彦根市では適切な保存管理のための資料収集として、平成4年度には地形の測量調査、平成5年度には遺構の保存状態を確認するための発掘調査を実施してまいりました。

湖東焼は、彦根市が誇る文化財であります。明治時代に廃窯となり残念ながらその全てを把握するまでには至っておりません。本年度は、5年度に確認した主要遺構である窯跡の全容を確認するための発掘調査を実施いたしました。

この調査結果を基に「彦根市埋蔵文化財発掘調査報告第28集」を刊行することになりました。本書が彦根市の歴史を知るうえでの手がかりとなれば幸いです。また、文末になりましたが、本調査事業にご理解とご協力をいただきました土地所有者の皆様をはじめとして関係各位に心からの感謝の意を表します。

平成7年3月

彦根市教育委員会

教育長 和田 豊 治

例 言

1. 本書は、文化庁・滋賀県の補助金の交付を受けて実施した、埋蔵文化財緊急発掘調査事業（滋賀県指定史跡湖東焼窯場跡）の成果である。

2. 発掘調査遺跡の地番は、彦根市古沢町字石ヶ崎 887 番地他である。

3. 本調査は、彦根市教育委員会が下記の体制で実施した。

彦根市教育委員会生涯学習課

課 長	松 田 一 實	副 主 査	本 田 修 平
課 長 補 佐	日 夏 秀 喜	技 師	清 水 千 恵
文化財係長	成 宮 誠		

4. 本調査に参加いただいた方々は次のとおりである。（敬称略）

大塚 智	岡本 修	近藤 周作	沢田 譲司	三摩 尚之
鈴木 千代	土田 政昭	西村 昭三	野村 圭史	林 利美
古川 善一	古川 久	森 秋男		

5. 本調査の資料は、彦根市教育委員会が保管している。

	1	梅 塚 遺 跡	8	六 反 田 遺 跡
	2	物 生 山 西 遺 跡	9	佐 和 山 城 跡
	3	宮 田 遺 跡	10	姫 袋 遺 跡
	4	矢 倉 川 遺 跡	11	物 生 山 城 遺 跡
	5	松 原 内 湖 網 代 口 遺 跡		
	6	松 原 内 湖 小 屋 遺 跡		
	7	松 原 内 湖 遺 跡	12	湖 東 焼 窯 場 跡
	湖 東 焼 窯 場 跡 お よ び 周 辺 の 遺 跡			

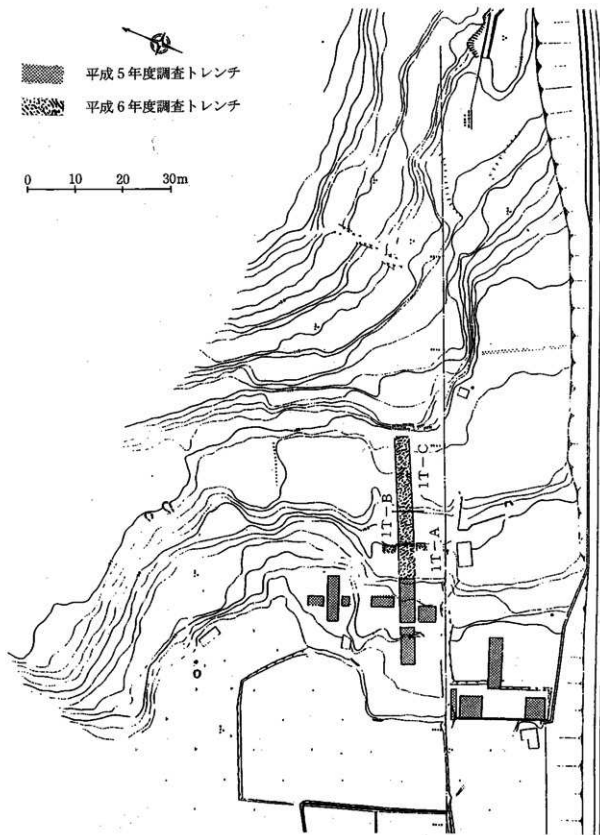
1. はじめに

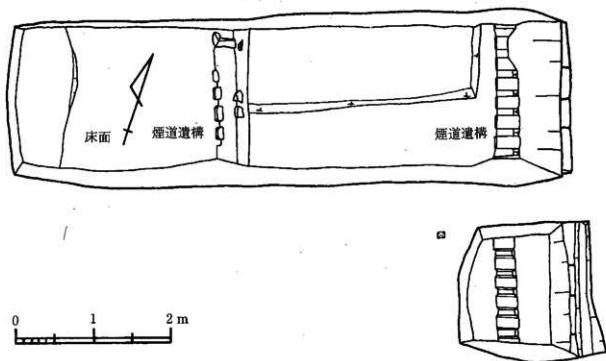
湖東焼窯場跡は、平成3年3月31日に滋賀県の史跡指定を受けた遺跡であるが、面積は約5,000㎡が指定されている。

湖東焼は、井伊直亮の時代に藩窯となり諸国から名工を招き技術の向上を図ったため多くの優品が焼かれた。これ等の作品群が伝世され、湖東焼はその名が高かったのであるが、表御殿の発掘調査等で日常雑器の出土例が増加し磁器のみを焼いていた窯ではないことが考えられていた。また、文久2年より明治28年までは彦根藩の手を離れ民窯として再出発しており、この時期にも活発に日常雑器を焼いていたと考えられる。昨年度の発掘調査の結果から見れば徳利・片手鍋等の陶器の日常雑器も多数出土している。また、鞘や窯道具も数多く出土しており、素焼き状態の磁器の未製品の数多い出土とあいまって、磁器の焼成も盛んであったことがうかがえた。

これ等の操業による廃棄物の量は非常に多く、連房式登窯の西側から北側にかけての斜面に造られたテラス状の段は、廃棄物によって埋め立てられていたと言っても過言ではなかった。また、今回は調査区域外としたが、竹藪の奥で廃棄物が小さな山状に盛り上がっている地点もあった。

湖東焼窯場跡 発掘調査トレンチ位置図

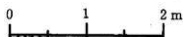
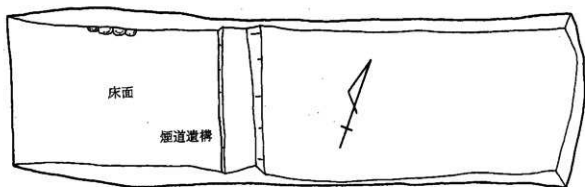




1 トレンチ-A遺構図

昨年度の発掘調査で確認できた主要遺構は、『御陶器場所地面并諸御建前御絵図』に丸窯と記される登窯であるが、遺構は窯内部の床面の一部だけが残存していた。この床面は、明褐色から赤褐色に固く焼き締まった面を成しているもので、煙道の構造は耐火レンガを敷いた間に粘土で作ったと考えられる半円形の煙突状の煙道を作り、上の房に取り付くものであった。この他上の房では、耐火レンガを立てて分煙柱にしたと考えられる遺構も確認している。以上のような構造で窯は築造され、1つのテラス状の段で2つの房が作られていたと考えられる。ただし、前回の調査ではテラスの奥の方の房は、煙もしくは竹藪の開墾時に削平されてしまっており、調査時には焼け土や灰の層だけの確認にとどまった。また、竹藪内の2段目の段の傾斜部では焚口の構造は明確に確認できなかったが、焚口基底部の固く叩き締めた床面を検出し、粘土を叩き締めて作った急な傾斜にした煙道と考えられる遺構を2箇所確認しており、焚口と最初の房は1mほどの段がついていた。

発掘調査で湖東焼窯場跡の主要遺構である絵図でいう丸窯の跡を確認できたことは、絵図との遺構の対比を行う上で1つの基準ができたことになると考えられる。このような、資料の積み上げが遺跡の全体像を考える上で重要な資料になると考える。ただし、現地は民有地であり面的な調査は不可能であり、今後徐々に調査を進めていく必要がある。



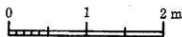
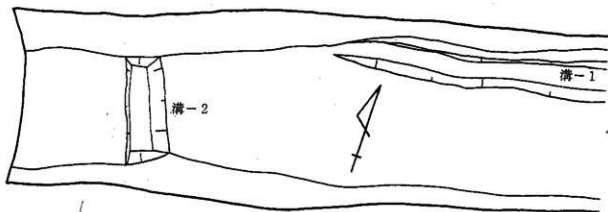
1 トレンチーB遺構図

2. 位置と環境

滋賀県指定史跡湖東焼窯跡は、佐和山の南斜面を分ける谷筋裾部に位置している。佐和山は、石田三成の居城として有名な佐和山城跡が所在した所であるが、窯場跡の所在する谷は金千貫に値すると言われた「千貫井」のある斜面の裾部にあたる。また、佐和山城は井伊氏が彦根に入府し彦根城を築城する以前にその居城とした場所で、佐和山城が廃城になって以来、江戸時代には切り通しを開削して中山道と城下をつなぐ重要なルートとなっていた。また、窯場跡が所在する「餅木谷」は、現在でも近江鉄道佐和山トンネルがあり、この南側には国道8号線佐和山隧道が通っている。このように佐和山を見るなら、まさに佐和山は地形的な関としての役割をはたしていることがわかる。

「餅木谷」は、彦根の城下から中山道へと至る切り通しの道を前面にした場所に位置し、交通の便は非常に良い。このことは、原料の搬入や製品の搬出に有利な条件であったとともに、彦根の城下から近いことも窯場の立地として考えられたことと思われる。また、松原内湖に近く運搬に船の利用も考えられる条件を備えている。

湖東焼窯場は、以上のような地理的条件を持っているが、もう1つ重要な条件は山の反対側



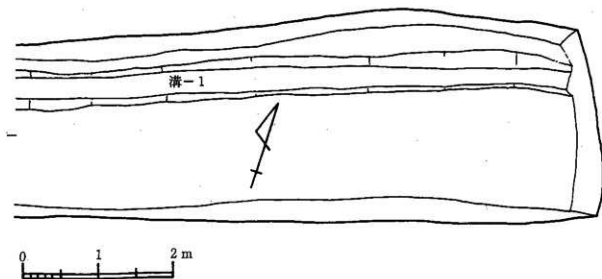
1 トレンチ-C遺構図前半分

の宮田町で物生山石と言われる釉薬の原料が見つかったことであると考えられる。

3. 調査結果

昨年度の発掘調査では、調査区域の関係で連房式登窯全体の調査ができず、焚口の煙道および房の遺構を4箇所分検出しただけにとどまった。絵図によると丸窯と書かれた登窯は、屋根が葺かれており、焚口および焚口からつづく焼成部の房の半分は萱状のもので葺かれ、上半分は板葺きだったようである。この絵図の様子から板で葺かれた上半分は、後からの増築部分であったことが考えられ、焼成のための房は最大に拡張された時期で9房を数える。この窯場跡が最大に拡張された時代は、直弼の時代であり、最終的に明治28年の当時に窯がどの程度の規模であったかは不明である。

このため、今回の調査では窯の全体の規模を把握することを主目的として調査を実施した。トレンチは、昨年度の調査で焼成部の房跡2箇所を確認したテラス上のテラス3段に前回のトレンチから直線的に伸びるように設定して実施した。このため、トレンチは1つのものであるが、テラスの打段ごとに下からA・B・Cとした。



1トレンチ-C遺構図後半部分

以下に、各トレンチについて記す。

《1トレンチ-A》

調査は、このテラスからまっすぐに上に向かってトレンチを設定したため実際は1本のトレンチであるが、便宜上各テラスごとにA・B・Cとして調査を実施した。

このトレンチは、昨年度の調査地点のすぐ上のテラスに設定したトレンチで、テラス斜面部に扉の床面と考えられる焼け面が調査前の地形で確認できていた所である。焼け面は赤焼けを成しており、6cm前後の厚さを持つしっかりしたものであった。

テラスの地形は、上の段まで6.5mを測るフラットな面を持つものであり、昨年度に調査した下のテラスのように中間に小さな段はなかった。このような現状の地形は、この上の段2段も同様の状態であった。

テラスの平面の土層は、50cm前後の厚さの表土下で窯の用材である焼けた耐火レンガや精・破棄製品等の埋立層になる。この埋立層は30cm以上あり、埋立層を取り去るとテラスの前半分では赤く焼けた扉の床面が検出された。床面は、テラスの斜面から50cmの幅で焼け土の層があり切れていたが、幅1.9mで確認できた。また、この奥は50cmの段で1段高くなり、焼け土や灰の層が広がっていた。この層は15cmほどの厚さがあり、下層は山土や



調査区域全景（南西側から）

岩を入れた整地層になり、窯の基底部のための丁寧な造成がなされていた。

また、上のテラスに続く斜面裾部では、耐火レンガを一つおきに並べた遺構が出土した。この耐火レンガはその上を灰が被った状態で検出できたが、火を受けた形跡はないことから見れば煙道の基底部の構造物と考えられる。また、傾斜部分で耐火レンガが積まれた状態で確認できたため調査したが、斜面の崩壊防止のために積まれた耐火レンガであったため、煙道の上部構造は確認できなかった。

以上のように、このテラスではしっかりした床面と床面のないところを確認しているが、この間には30cmの焼け土の入った柔らかい層があり、他のトレンチの状態から見れば耐火レンガを並べた煙道の一部であることが考えられる。

《1 トレンチ-B》

今回の調査では、3段の階段状のテラスに直線的にトレンチを入れて実施したが、このトレンチを設定したテラスは奥行き6mを測るもので、テラス斜面中段で強く焼け表面がガラス質化した耐火レンガの列が露頭していた所である。

土層は、基本的には下のテラスと同様の状態を示し、20cmの表土の下に耐火レンガや精・輪トチン・柱状支脚等のガラが放り込まれた状態で埋め立てられていた。この下でAトレ



1 トレンチーB全景

ンチ同様、赤く焼き締まった床面が確認できた。この床面は、斜面で露頭していた耐火レンガを区切りとし幅2.7mを測り、奥は40cmの柔らかな焼け土層を挟んで50cmの段につき1段高くなる。段の上は、焼け土・灰の層になるが段の下の層と異なりかなり締まったものであった。また、この房の床面とその奥の高まりの間の柔らかな焼け土層を掘り込むと耐火レンガを並べた遺構を検出した。

斜面で確認している耐火レンガの並びは強い焼け面が見られることから、前の房から次の房に至る煙道の最終段階の開口部で火炎が直接当たる部分であることが考えられる。また、斜面では耐火レンガを床面に固定し、下に続く状態で途切れた床を確認した。その厚さは5cmで、材質は三和土に似た粒子のものであり、粘土に焼き締まりを防ぐための砂を混ぜたものと考えられるが、材質の分析はしていないので不明である。

テラスの奥の段は、1 トレンチーAとほぼ同様の状態を示すことから、ここにも房があったと考えられるが、断面の状態から見れば窯跡の埋立層は一旦切れることから明治28年の最終時点ではこの房は既に無かった可能性がある。



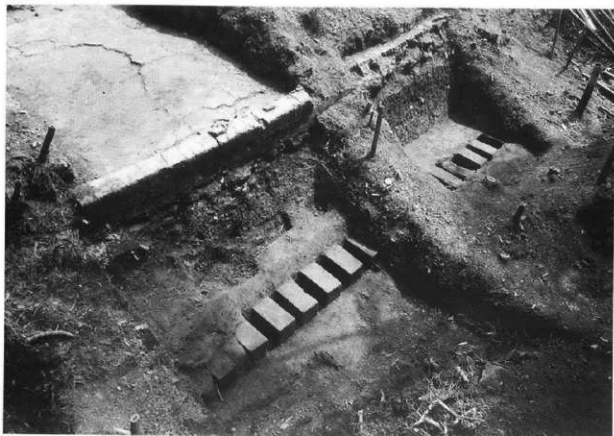
1 トレンチャーA煙道デテール

《1 トレンチャーC》

窯跡が所在するテラスの最終段に設定したトレンチャーである。地形は、北側にすぐ佐和山の自然斜面があり、東側は畑地となり近江鉄道佐和山隧道まで平坦地となっている。テラスは奥行き14mを測り、下のテラスとの比高は1.6mと今回調査した3段のテラスの中では1番高い。

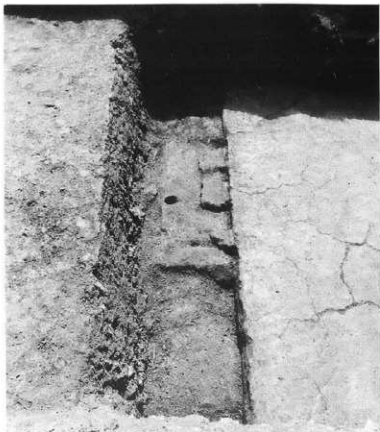
テラス前半3分の1の土層は、基本的には下2段のテラスと同様30cmの表土を取り去ると耐火レンガや竈・柱状支脚等で埋め立てられた層が80cmの厚さで確認できた。この層は、1時期に埋め立てられたと考えられ、空洞の中に土が流れ込んでいない状態を示していた。また、素焼や未製品等の出土は少なく、その大半は竈が占めていた。この下の層は、土を主とした層であったが、若干竈等のガラや焼け土等が混じっており、土質は違うが基本的には同一の時期に埋められた層と考えられる。

テラス奥の3分の2は、20cmの表土層および全体で10cm前後の薄い焼け土層・淡黒褐色土層を取り去ると地山の岩になる。この岩を深さ70cmで丁寧に掘り込んだ幅50cmの溝を検出した。溝は、竈等の窯道具や若干の未製品等で埋められており、今回設定したトレンチャーの外に延びていた。また、この溝はテラス前半3分の1の所で消えるが、この地点は地山の岩を「馬蹄形」



1トレンチャーA煙道遺構

に削り、この下に上の溝と直交する溝を幅50cm・深さ50cmで掘り、上からの水を受けていた。テラス奥の段で確認した溝は、佐和山の自然地形の斜面の裾を走り、山からの水を受けて流し、この水が窯に流れ込まないように下の溝で受け、窯の両側に流していたと考えられる。湿気は、窯に影響を及ぼす一番のものであることから、かなりしっかりした溝を造っていたことを示している。窯周囲の溝は、「御陶器場所地面并諸御建前絵図」に描かれたものと合致し、窯が最大に拡張された時期でもこの溝までであったことがわかる。



1 トレンチ-B 煙道痕跡

4. ま と め

以上のように、今回の調査では窯の全体の規模を確認することを主目的にして実施したが、1 トレンチ-Cで確認したように窯の最終地点と考えられる溝が出土したことにより、窯跡は全長で約30mにおよび房は6箇所あったものであることが確認できた。ただし焚口は煙道を確認しているだけで、笹竹の藪が茂っていることから焚口全体は確認できていない。また、各房の床面はそれぞれに幅が異なっているが、各房の保存状態によるものと考えられ、地形によって床面の保存状態の良いところと床面そのものが削平されてしまったところがある。しかし、窯は階段状にやや大きい粒子の土で丁寧に造成した製地層の上に造られていたもので、この土の選択は湿気が抜けやすいことを第1の条件にしていたものと考えられる。この製地層に使った土の選択と周囲に掘られたしっかりした溝で焼成時の温度の安定化を計っていたものであることがわかる。

昨年度と今年度の2度の調査で確認した窯の焚口は、煙道部が直角に近い急角度で立ち上がる四角錐を半截したような煙道を2箇所で見出した。その材質は、粘土に砂を混ぜて叩き締められたもので、検出状態はあまり火を受けた形跡はあまり無く、焼き縮まった状態ではないがしっ



1 トレンチーB前半部床面

かりした造りで、この上に粘土で半円形の分煙口が造られていた。この煙道が焼成部分である房に取り付き1段目の房が形成されていた。第1房は、床面の保存状態はあまり良くなかったが煙道施設は比較的に残りが良く4.5m×5mの規模で復元できる。第1房目の煙道は、耐火レンガを分煙柱とし、その後ろに粘土で半円形の構造を造るもので、煙道前の床面にはレンガを並べた痕跡があり一つの房の中でも床面には若干の段をつけていたことがわかる。また、この奥にも一部ではあるが床面が検出でき第2房の遺構と考えている。

焚口と1段目の房の比高は1mほどであるが、1段目のテラスの地形はテラス奥の半分で50cm前後の段がついており、第2房の床面が保存されたものと考えられ、今年度の調査地との違いがある。

以上のように、確認できた遺構を全体的に見れば、焚口第1房の比高は1mほどであったが、各房は50cmの比高を持って造られていた。この段が今回の調査区域のテラスでは、奥の段を削り手前に盛る造成の手法で畑地にしていた。この関係でテラス前半部の房は50cm前後埋められており、床面の保存状態が良かったものと考えられる。この埋立には、竈・柱状支脚・輪トチン等の窯道具、房の築造材料の耐火レンガ、焼成時の失敗作・絵付け前の素焼の未製品等が使用されていた。窯道具等のガラは、非常に多くの量であり、窯の埋立の他に作業用の工房の造成にも使われており、湖東焼窯場跡のテラスの多くが窯道具による埋立であると思われる。



1 トレンチャーC前半部北西側断面

湖東焼窯場跡は、その現状が田・畑地および山林であるが、窯場が明治28年に廃窯になって以来、そのほとんどの地域が耕作地として開墾された歴史を持っている。この開墾は、窯跡が手近に入手できる窯道具等のガラで埋め立てられていたように、あまり労力を使わない方法を探っていたと考えられる。また、現状の地形が窯場の絵図とほぼ同じ地形を保っていることから、大規模な地形の改変は行われていなかった。工房から耕作地への開墾は、上記の状況を考えれば、他から耕土を持って来るような大規模なものではなく、旧表土層をそのまま生かし、建物の礎石を取り去る程度のものであったと考えられる。このため、遺構から工房跡を復元することは困難な状況である。前回の調査で明確な工房の遺構を確認できなかった理由は、開墾されたためであると考えている。

前回と今回の発掘調査で窯場跡の主要な遺構である窯の位置を確定できたことは、現状の地形と「御陶器場所地面并諸御建前御絵図」との詳細な比較が可能になったと考える。このことは、2回の発掘調査が今後の湖東焼の基礎資料になるものと考えられる。ただし、発掘調査は窯場跡の1部を調査しただけであり、今後も調査を実施する必要がある、湖東焼研究の進展に期待したい。

報告書抄録

フリガナ		シガケンシテイシセキ「コトウヤキカマバアト」							
遺跡名		滋賀県指定史跡「湖東焼窯場跡」							
副書名									
巻次									
シリーズ名		彦根市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号		第28集							
編著者名									
編集機関		彦根市教育委員会							
所在地		〒522 滋賀県彦根市元町4番2号						TEL 0749-22-1411	
発行年		1995年3月31日							
フリガナ 収集遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
湖東焼窯場跡 コトウヤキカマバアト	彦根市 シガケンシテイ シセキ コトウヤキカマバアト	25202	-	35°17'50"	130°17'50"	19950304 19950331	2,000㎡		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
湖東焼窯場跡 コトウヤキカマバアト	生産遺跡	近世～近代	窯跡 工房の整地跡		窯道具： 精 柱状支脚 輪トチン 湖東焼未製品		連房式登窯跡		

彦根市埋蔵文化財調査報告 第28集
平成6年度市内遺跡発掘調査報告書
—滋賀県指定史跡湖東築窯場跡—

平成7年3月

編 集 彦根市教育委員会
発 行 彦根市教育委員会
印 刷 樹づくし出版印刷

